

イランの首都テヘラーン

織 田 武 雄

【要約】 イランの首都テヘラーンはエルブルズ山脈の南麓に発達した広大な扇状地に位置している。テヘラーンの周辺は気候は乾燥しているが、エルブルズ山地の融雪水や地下水にめぐまれ、また交通の中心をなすため、イランでは最も早く開発された地域の一つであり、古代にはレイがその中心で、セルジュク朝の首都として繁栄した。しかしモンゴル軍の侵入によってレイは廃都となり、それにかわってテヘラーンが発達するようになり、サファヴィ朝にはテヘラーンに城壁が築かれた。さらにカジャール朝にはテヘラーンはイランの首都となり、地域の拡大によって、サファヴィ朝の旧城壁は撤去され、パリーにならって八角形の新城壁がつくられた。しかしテヘラーンが近代都市として発達するようになったのは、現在のバフラヴィ王朝のレザー・シャーの時代になってからである。テヘラーンは今日では中東地方においてカイロに次ぐ大都市であり、人口約一六〇万を有するが、典型的な消費都市であり、周辺には衛星都市の発達はみられず、都鄙の懸隔が顕著である。また都市内部においても、その社会構成を反映して、近代化された市街と、近代化からとり残されたスラム街的な市街との対照が著しい。

は し が き

筆者は一九五九年の京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン第一次学術調査隊に参加して、イランの首都テヘラーンには比較的長い期間滞在する機会が与えられた。テヘラーンは今日では、中東地方においてカイロに次ぐ大

都市である。しかし、これまでわが国ではテヘラーンに関する文献が極めて乏しいので、ここにその紹介の意味も含めて、テヘラーンの都市地理学的研究を試みたのであるが、人口調査さえ実施されていないテヘラーンでは、より詳細な都市地理学的研究を行い得る資料を入手することは、現在ではまだ望み得ない。そのため拙稿も予察的な報告に止

まるものである。なお、重力測定研究のためイランに二カ年間滞在された京都大学教養部の東中教授に多くの御教示を得たことを記して、謝意を表する。

一

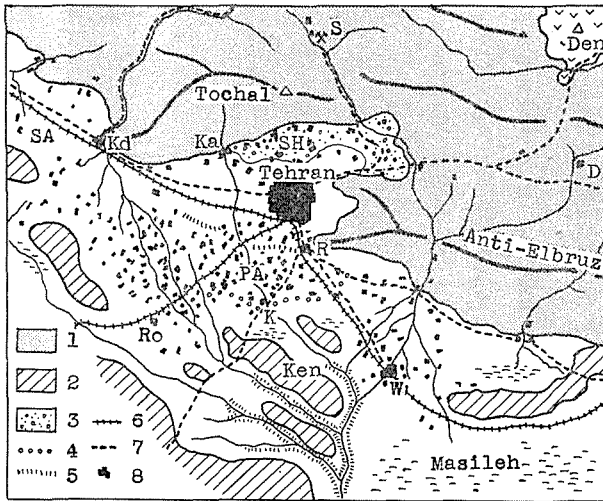
イランの北部において、イラン高原とカスピ海との間に障壁のように東西に連亘する Elburz 山脈の南麓に、イランの首都テヘラーンが位置している。エルブールズ山脈はアルプス・ヒマラヤ造山帯に属する新期の褶曲山脈であり、高度4000 m 程度の高峻な山系が何条にもわかれて並走し、テヘラーンの東北に望見される西アジアの最高峯 Demawand (標高5683 m) 火山などの噴出もみられる。テヘラーンの北20 km の距離にそびえる Tochal 山脈もその一つの山系であり、高度4000 m 近くを有し、Green Beds と呼ばれるように、主として古第三紀の緑色凝灰岩をもつて構成されている。^① またテヘラーンから東には、一般に Anti-Elburz 山脈とよばれる高度2000 m 前後の、古生代および中生代の地層よりなる山地がエルブールズ山脈の前方山地帯をなして、やはり東西に走っているが、その最西端

はテヘラーンの南の Rey 付近で終って、平原地帯に没している。

これらの山地に対して、テヘラーンの位置する平原地帯は Tochal 山脈とは衝上断層によって割かれ、その山麓地帯は Shemiran 付近で 1,800 m、Karaj 付近で 1,600 m の高度を有するが、それより南方約 90 km の距離にある Kavir 砂漠 (高度約 800 m) に向って徐々に低下し、広大な扇状地堆積面を形成している。したがってテヘラーンの市街も北部では 1,250 m の標高を有するが、南部では 1,050 m と約 200 m の高度差を示している。

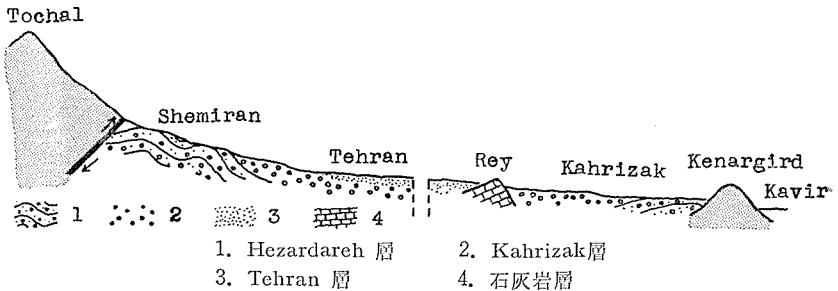
この扇状地を構成する最下層の Hezardareh 層は鮮新世、或いは中—鮮新世のものと考えられ、軽度の褶曲を示し、北部の扇頂部ばかりでなく、南部の扇状地末端の部分にも広く露出している。殊にテヘラーンの北の Shemiran から北東の Hezardareh にかけての山麓地帯では、礫層が著しく厚く堆積して丘陵をなし、Hezardareh とは「千の谷」を意味するように、礫層を侵蝕して多数の小谷が刻まれている。Clapp はこの礫層中にデボン紀の礫が多量に含まれていることを指摘しているが、^② ハザルダレー層は Tochal 山

第1図 テヘラーンの周辺



SA, Saujbulak. S, Shamshek. Den, Demawand 山
 SH, Shemiran. Ka, Karaj. R, Rey. W, Waramin
 K, Kahrizak. Ro, Robotkarim. Ken, Kenaregird 丘陵
 PA, Pashapuych. D, Demawand

第2図 テヘラーン付近の地質模式図



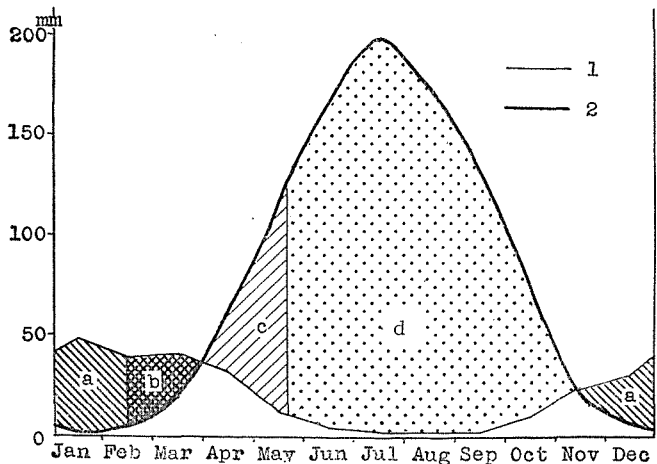
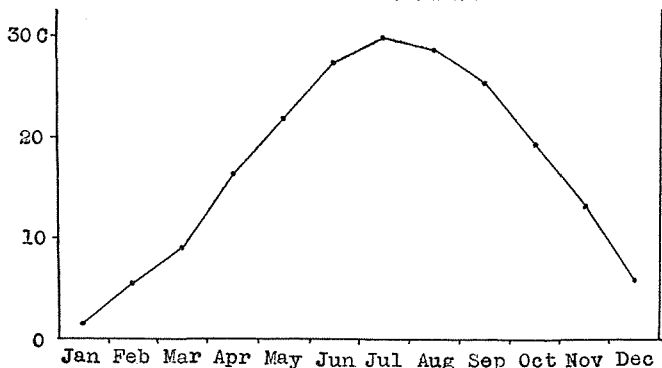
脈の隆起がまだ著しくなく、エルブルズ山脈中央部の古生代地層からの供給によって形成されたのであろう。Jajend 河もかつてはテヘラーンの方向へと西南に流れていたが、礫層の夥しい堆積によって流路をはばまれ、現在みられるように、アンティ・エルブルズ山脈を横断して Waramin の方向に流路を転ずるに至ったものと推定される。

またヘザルダレー層の上には、Kahrizak 層と Tehran 層とがそれぞれ不整合に被覆している。テヘラーン層は最も新しい堆積で、テヘラーンの南の Rey 付近まで分布しているが、それから以南では第四紀中期の堆積であるカフリザク層にかわり、さらにカフリザク層はほぼ Kahrizak 付近を南限として、前述のように再びヘザルダレー層に移行している。さらに扇状地の末端の部分では、Kavir 砂漠との間に、中新世の凝灰岩、礫岩などがアンティ・エルブルズ山脈の隆起と関連して背斜層をなして扇状地面に現われ、Kenaregir などの丘陵性山地を形成している。しかし侵蝕を受けやすいので、バッド・ランド状の地形をなし、また Karaj 河などの下流が先行性河谷をなして流れている。このようにテヘラーン扇状地は砂礫層が極めて厚く堆積

しているため、エルブルズ山地から谿谷を通じて流下してきた融雪水は、山麓地帯において大部分は地下に消失する。それに気候が著しく乾燥しているので、扇状地面では河川は甚だ乏しく、植物が僅かに成育する裸出した地表をなしている。しかし地下に滲透した水はヘザルダレー層において豊富な地下水層をなし、扇状地の傾斜に従って流下しているため、^⑤カナートの発達によって、この平原地帯には、テヘラーンをはじめ、多数の集落や耕地の分布がみられるのである。

次にテヘラーンの気候についてみれば、テヘラーンは 35°40'N に位置し、高度約 1200 m のイラン高原上にあるが、背後にそびえるエルブルズ山脈によって寒冷な北風の影響からさえざられ、南は Kavir 砂漠に向って広くひらけている。そのためテヘラーンの年平均気温（撰氏）は 16.5°であり、テヘラーンと緯度はほぼ等しく、高度 950 m の Meshed の年平均気温 12.9°と比較してみても、テヘラーンの気温は緯度や高度の割合には高いことが知られる。^⑥しかしテヘラーンも大陸性気候を呈し、一月の平均気温は 11.1°まで低下するが、七月の平均気温は 28.5°にまで上昇

第3図 テヘラーンの気候図表



上図は気温、下図は降水量と可能蒸発散量

1. 降水量 2. 可能蒸発散量

- a Soil moisture recharge
- b Water surplus
- c Soil moisture utilization
- d Water deficit

Singapore の 27.3° と Colombo の 27.5° よりも高く、
 テヘラーンの夏は昼間で 38°。夜間で 22°。内外の日が続くこ
 とが多く、殊に Kavir 砂漠からの熱風が送られてくると
 きには、気温はさらに高まり、夜間でさえ 35° を降らない

ほどである。
 またカスピ海の沿岸をのぞけば、イランの気候は全体と
 して著しく乾燥し、テヘラーンでも年降水量は 200mm に
 過ぎない。しかもその大部分は、十一月から四月にかけて
 の冬の期間に集中し、
 冬には多少の積雪もみ
 られるが、六月から九
 月にかけての夏の四カ
 月間は全く雨らしいも
 のはみられないばかり
 でなく、気温が著しく
 上昇するので、気候は
 極度に乾燥する。すな
 わちテヘラーンの各月
 降水量と可能蒸発散量
 (Potential evapotranspi-
 ration) とを比較してみ
 ると、降水量が蒸発散
 量よりも多いのは冬の

の冬の期間に集中し、
 冬には多少の積雪もみ
 られるが、六月から九
 月にかけての夏の四カ
 月間は全く雨らしいも
 のはみられないばかり
 でなく、気温が著しく
 上昇するので、気候は
 極度に乾燥する。すな
 わちテヘラーンの各月
 降水量と可能蒸発散量
 (Potential evapotranspi-
 ration) とを比較してみ
 ると、降水量が蒸発散
 量よりも多いのは冬の

十一月から三月までであり、四月以降は降水量は殆ど 0 mm まで減少する。これに対して蒸発散量は気温の上昇にともなつて急激な増加を示し、冬の降雨によつて土壤中に蓄積されていた水分も五月までには消費され、五月から十月までは、土壌には著しく水分が不足する。したがつて夏の作物栽培のためには、山麓地帯では融雪水、平原地帯ではカナートなどの灌漑によつて、多量の水分を補給することが絶対に必要となるのである。

しかしテヘラーン周辺でも山地と平地とでは気候にかなりの相違が認められる。エルブルズ山地では高度が増加するほど気温は減じ、降水量は増加する。そのため冬は積雪も深く、谷間には七月末ごろまで残雪が認められ、さらに 4000 日の雪線以上の高峯では、万年雪として消えることがないから、テヘラーンの東北にそびえる Demawand 山の山頂は夏でも白雪に覆われている。またテヘラーン北部の Shemiran やティヴァンド山麓の Demawand は、夏も冷涼であり、古くからテヘラーンの避暑地として知られている。

平原地帯では、Kavir 砂漠に近う Waramin は夏はテ

ヘラーンよりもさらに暑いが、冬の寒い期間もそれだけ短い。したがつてヴァラミンでは春の植物の発芽期は三月上旬にはじまるが、テヘラーンでは三月下旬、エルブルズ山地ではもつとおくれ、四月から五月にかけてみられる。

また降水量が少ない上に、夏の高温、乾燥が甚だしいため、エルブルズ山地でも森林は殆どなく、岩石や砂礫地が裸出し、乾地性の有棘灌木やヨモギ類などが点的に成育するに過ぎない乾燥ステップか半砂漠をなし、殊に夏には大部分の植物が枯死してしまうので、一層荒涼とした景観を呈する。しかし山麓地帯の谿谷とか、集落や灌漑水路の周辺には、点々と緑の集団がみられる。果樹に恵まれたイランでは、家屋や菜園のまわりに、ナシ、モモ、ブドウ、イチジク、ザクロ、アンズ、クルミなどの多くの果樹が栽培されている。また果樹以外の樹木では、建築用材として、あるいは街路樹や庭園に植えられたものが多く、ポプラ、ヤナギ、スズカケをはじめ、ニレ、トネリコなどの広葉樹が主であり、針葉樹ではマツ、ネズなどである。

テヘラーンという名称の起源については確実なことは不明であるが、Schindler が、*tiran* すなわち「平野」を意味すると推定しているように、^⑦ エルブールズ山脈の南麓に沿って、東は Khorasan 地方から西は Azerbaijan 地方にまで及ぶ平原地帯が細長く連なり、イランの北部を通ずる自然の東西交通路をなしている。ことにそのうちでもテヘラーン一帯の地域は、前述のように南方の Kavir 砂漠に向って広大な扇状地形が発達し、エルブールズ山脈から流下する小河川や地下水によって水利にも比較的恵まれ、また東西交通路のほか、南東へは Hamadan からメンポタミア方面へ、南西へは Isfahan, Shiraz, Kerman などに通ずる交通路が、テヘラーン付近を中心にして集中している。

したがってテヘラーン自体が都市となり、さらにイランの首都として発達したのは、はるか後の時代であるにしても、テヘラーン周辺はイランでは最も早く開発された地域の一つであり、テヘラーンから南方 8 km の地点にある

Rey やは' Sialk 遺跡とはほぼ同時代の、B. C. 4000 年ごろの新石器時代遺跡が発見されている。^⑧ またレイは古代には Rhaghae とよばれ、紀元前六世紀ごろのメディア時代にはすでにここに都市が発達していたとみえ、旧約聖書外典「トビト書」には、Tobit が息子の Tobias を Nineveh からメディアの Rages に使わした物語が記されており、アレクサンダー大王もまたダリウス三世を追撃して、B. C. 330 年に、Ecbatana (現在の Hamadan) から一〇日間の行程をもつてここに到着している。^⑨

さらにローマ時代の地理学者 Strabo によると、^⑩ セレウコス朝の始祖 Seleucus Nicator (B. C. 281~261) はレイを再興し、彼の生地のマケドニアの都市の名にちなんで、Rhaghae を Europos と改め、またハルティア朝では Arsacia とよばれた。このようにレイに早くから都市が発達したのは、アレクサンダー大王が通過したと思われる古代の交通路が、Ecbatana, Saveh からレイを経て、Khorasan 地方に通じていたこと、^⑪ また現在でもレイには有名な「アリの泉」(Cheshmeh Ali) とよばれる湧泉が存在するように、レイの付近は、背後のアンティ・エルブールズ

山地の石灰岩をもって構成され、地下水が豊富に湧出するからである。かつ古代の水路の遺溝が認められるように、レイの東方を流れる Jajrud 河の谿口からも、水路によってレイに引水し得たのである。^⑧

その後もレイは、ササン朝末の Yazdagird 三世の 641 年にアラブ人の侵入を受け、或いは 863 年には地震によって破壊されたこともあったが、約一〇世紀間にわたって、この地方の中心的都市として栄えた。殊にセルジューク朝の始祖 Tughril Beg (1037~1063) が中央アジアから進出してイランの地を平定し、レイを首都としてセルジューク帝国を建設して以来、レイは繁栄の頂点に達した。^⑨セルジューク朝の時代は、イラン文化史上の最も重要な時代であり、イスラム科学や文学、芸術が燦然たる光彩を放ち、特にレイはペルシア陶器の大産地であった。今日、この都市の廃墟から掘り出される陶器類は、ペルシア陶器の逸品であり、ラゲー陶器として世界的に著名である。

しかし隆盛をきわめたレイの首都も、1220 年にはモンゴル軍の侵略を受けて徹底的に破壊されて衰微し、僅かに当時の城壁のみが土塁として残っている全くの廃墟と化し

てしまったのである。

このようにレイが繁栄していた時代は、テヘラーンはせいぜい大きな村落の程度に過ぎなかった。テヘラーンに関する最初の記述は、アラビアの地理学者 Yaqut にみられる。^⑩ヤクトはモンゴル軍の侵入前にこの地方を訪れた。

彼によると、テヘラーンは一二の地区からなる集落であるが、住民は半穴居の住居を営み、また周辺では広く菜園が耕作されていると記していることからみて、テヘラーンはまだ貧しいレイの郊村的集落であり、レイに蔬菜などを供給するための農業が行われていたことがうかがわれる。

しかしモンゴル軍によるレイの荒廃以後は、テヘラーンがレイにかわって発達するようになった。ティムール朝に派遣されたスペインの使節 Clavijo は、サマルカンドへの途上、1404 年にテヘラーンを訪れ、ヨーロッパ人としてはじめてテヘラーンについての知識を伝えた。それによれば、レイはもはや無住の廃墟となっていたのに対し、テヘラーンを「都市」(cintad) と記していることからみて、まだ城壁は存在していなかったにしても、すでに或る程度市街が形成されていたことがうかがわれる。

第4図 テヘラーンの旧城内（改修前）



テヘラーンが城壁をめぐらすようになったのは、サファヴィ朝の Tahmasp 一世 (1524~1576) の時代である。サファヴィ朝では Ardebil, Tabriz, Qazvin, Isfahan がそれぞれ歴代の首都に選ばれ、テヘラーンはまた重要な都市とはなっていないかった。しかしタフマスプ一世の1555年には、テヘラーンに行在所が置かれるようになり、それとともに、周囲約8kmの空濠をめぐらした不規則な四辺形の城壁がつくられた。この城壁は土塁をもって築かれ、四つの城門（後には七つに増加）を有し、面積約38km²の城内には、バザールが設けられたほかに、いま一つの城壁にかまれた長方形の内城 (Agha) を有し、内城には王宮、政庁などが置かれた。またさらに Shah Abbas 一世のころに、Chahar Bagh (四つの園)の庭園が造られた。

シャー・アッバス一世の1628年、イギリス大使に随行してイランを訪れた Herbert の旅行記の一節によれば、

「Teyroan (テヘラーン) は大きな平野の中央に位置し、遠方は丘陵によって囲まれているが、一方だけは広い水平線がひらけている。空気は朝夕は溫和であるが、正午ごろは非常に暑い。家屋は日乾しの煉瓦でつくられ、市内には約三〇〇〇戸の住居があり、王宮やバザールは甚だ美しい。バザールは二つの部分にわかれ、

一つには屋根がないが、いま一つは屋根つきである。二つの小川が市街を流れ、林や庭園に注いでいる。……市街に接して、高い土の城壁に面して王の非常に広大な庭園があり、規模は市街にも劣らぬほどである。……ここでは隊^{キャラク}商宿^{セライ}は Meclit (モスク) よりもはるかに立派である。」家屋が約3,000戸とすれば、当時のテヘラーンは15~2万の人口を有していたであろう。

テヘラーンはサファヴィ朝において城廓都市にまで発達したが、テヘラーンがはじめてイランの首都となったのは、カジャール朝の始祖 Agha Muhammad の1785年である。カジャール朝はカスピ海に面する Mazandaran, Gorgan 地方において勃興し、エルブルズ山脈を越えてその勢力を進展し、当時イラン地方を支配していたアフガン族のゼンド朝の勢力を排して、国土を平定し得たのである。したがってカジャール朝発祥の地であるマーザンデラン、ゴルガン地方に近く、しかもイラン全土を支配する拠点には、テヘラーンが、最もすぐれた地理的位置を占めるものとして、その首都に選ばれたのであるが、首都として発足した当時のテヘラーンはサファヴィ朝時代と大差はなく、首都

らしい外観や規模も有していなかった。1786年の夏にテヘラーンを訪れたフランスの博物学者 Olivier によれば、住民の多数が郊外のシエミランなどへ避暑のため減少していたにしても、テヘラーンの人口は約15万に過ぎずとし、またそのうちの約3,000人は軍隊によって占められていると記している。^⑧

しかしその後、テヘラーンはカジャール朝の首都として次第に発達し、Fath Ali Shah (1797~1834) は内城^{アッヤ}に Gunistan の宮殿を造営した。また人口も十九世紀中葉には5~6万ほどに増加したので、城内は狹隘となり、城壁の外部にも、七つの城門に通ずる街道に沿って市街の一部が延長されるようになった。すなわち城外の西南の Qom に通ずる街道に沿っては陶器業者、城外の南部には煉瓦製造業者などの集団がみられたのに対し、城壁の北部地区では、カナートから流出する清冽な水が得られるので、富裕な市民の住宅や外国商館をはじめ、兵營・病院などが次第に増加するようになった。

その結果、Nasir ad-din Shah の時代の1869年から74年にかけて、市域の拡張工事が開始され、サファヴィ朝以

来の旧城壁を撤去し、パリーの城壁をまねて、周囲約15.5 kmの八角形を呈する新しい土塁の城壁が築造された。この新城壁によって市域の面積は一躍五倍ほど増加して約19.5 km²となったが、旧城壁と新城壁との距離は、南部や東部では700~1,000 mしか距っていないのに対して、北部では2,000 m以上を有し、それだけ市域は北部に広く拡大された。^⑥新城壁は軍事的意義よりは、都市に威観をそえることが目的であったが、その周囲には深さ3~10 m、幅30 mほどの空濠がめぐらされ、城壁には黒と白のタイルで美しく装飾された煉瓦づくりの一四の城門があり、空濠に架せられた石造の橋によって、テヘラーンに集中するそれぞれ街道に通じていた。

また市域の拡張とともに、市街の整備も行われた。旧城内では袋小路の狭い屈折した道路が複雑に錯綜して、オリエント特有の迷路をなしているが、新城内の市街では、旧城壁を撤去した跡や、ヨーロッパ風の都市計画を採り入れ、Talezar 街、Ala al-Dalwa (現在の Ferdowsi) 街などのように広い直線道路が設けられ、さらに後には旧城内からラレザール街に通ずる鉄道馬車が敷設された。またパリ

ーなどにならって、Maidan すなわち「広場」が設けられた。その主なものとしては、王宮の所在する内城とバザールとの間には「王の広場」(Maidan-i-Shah) があり、内城の北側に接した新城内には「大砲広場」(Maidan-i-Tupkhana) が置かれた。この広場は面積2,400 m²を有し、周囲には国立銀行、警察本部、兵営などの建物が配列し、広場の中央の池辺には、国威を誇示するために、シャー・アッバス一世の1662年に、オルムズ島においてポルトガル軍から鹵獲した大砲が陳べられていた。またその西に接して、面積157,000 m²の広大な「練兵場」(Maidan-i-Marshk) も設けられた。そのほか、テヘラーンとQazvin やQomの間新しい街道が建設され、またイランにおける最初の鉄道として、1892年には市の西南からレイに向う9 kmの軽便鉄道が敷設された。このように市域が拡張され、首都としての外観や機能もようやく整ってきたが、人口もそれにもなっって一世紀間に五倍以上も増加し、Stahi はテヘラーンの1910年の人口を約25万と推定してゐる。^⑦

三

しかしテヘラーンが今日みられるような近代的大都市に成長、変貌するに至ったのは、1925年にカジャール朝にかわって、Reza Shah による現在のパフラヴィー朝の時代になってからである。レザー・シャーは国名をペルシアからイランと改め、また近代国家の建設のためにつとめてヨーロッパの文物を撰取し、政治、経済、社会の諸方面にわたって多くの改革を行った。テヘラーンについては、レザー・シャーは中央集権的体制を確立するにはまずテヘラーンをもって国内交通の中心となすことにあるとして、1938年にテヘラーンを起点としてカスピ海沿岸の Bandar Shapur とペルシア湾沿岸の Bandar Shah とを結ぶ 1,400 km の縦貫鉄道建設計画を樹立し、一〇余年の歳月を経て 1938 年に完成をみたのであるが、現在ではさらに Meshed, Tabriz, Yazd (将来は Kerman, Zahedan に延長の豫定)に通ずる支線も、すべてテヘラーンが起点となっている。

また近代的都市施設としては、ガスは 1875 年、電気は 19

05 年と、すでにカジャール朝時代に小規模ながら開始されて、その後の発達をみたのであるが、飲料水その他の用水は、すべてエルブルズ山麓からの 88 個のカナートによって供給されていたのである。しかしカナートでは増大する人口に対する用水不足を補充し得ないので、1926 年には Karaj 河からの用水路の開鑿によって、近代的水道事業も完成した。カラジ河はエルブルズ山脈の豊富な融雪水を受け、一秒間 273 億の水量を有し、殊に最近のカラジ・ダムの完成によって、テヘラーンへは電力の供給とともに、用水においても現在の人口に対して優に二倍の供給量を確保するに至ったといわれている。²⁰⁾

かくしてテヘラーンは名実ともにイランの首都として発展しつつあったが、しかし第二次大戦前までは、まだカジャール朝以来の城壁都市であった。そのため、人口の都市集中とそれによる人口の増加は、城壁の外側の地域、すなわち扇状地頂部に面する北郊の高燥地帯や、現在国際空港 Mehrabad の存在する西郊へと、新市街の拡大、成長をもたらした。それに石油資源が豊富でガソリンの安価なイランでは、自動車交通の著しい発展がみられるようになった。











第5図 テヘラーンの市街

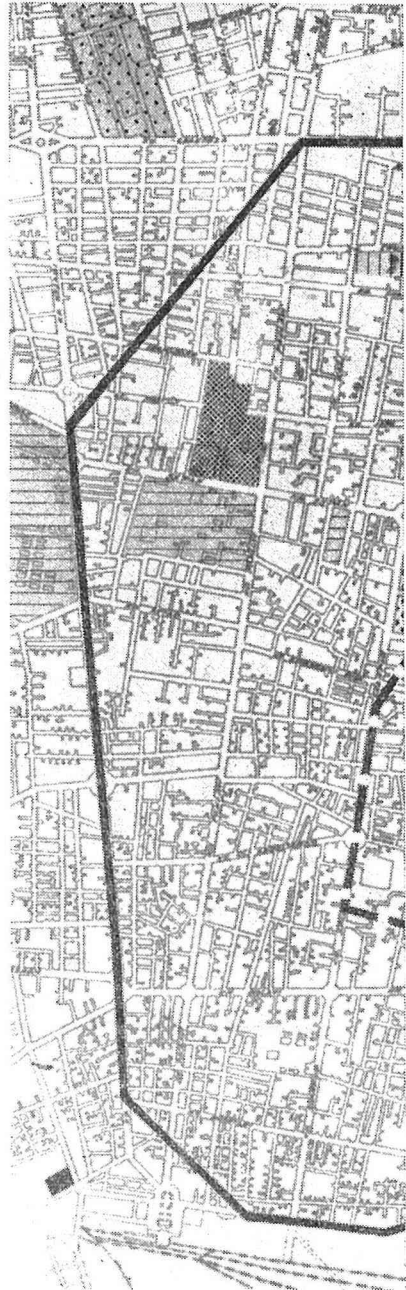


殊に市街電車が存在しないテヘラーンでは、自動車が過去の馬車や馬車鉄道にかわつて市内の唯一の交通機関をなし、今日では二階だての大型バスが市内を縦横に通じ、タクシー、乗用車、トラックなども年々急速な増加を示している。したがつて首都の象徴であつた城壁は、市街の膨張、交通量の増大に対してますます大きな障害となつてきたため、

すでに1936年から城壁の撤去がはじまり、現在ではカジャール朝時代の城壁や城門は全く残つていない。城壁の撤去とともに、近代的都市計画も平行して行われた。これまで極めて狭隘で屈曲した道路しかなかったイランの諸都市では、自動車交通の発達によつて道路の拡張が必要となり、そのため道路の整備を中心とした都市計画が

1. 商業地区
2. 官庁地区
3. 外国大使館
4. 王宮
5. テヘラーン大
6. 学
7. 軍用地
8. 工場
9. サファヴィ朝
10. 旧城壁

- | | |
|---|----|
|  | 1 |
|  | 2 |
|  | 3 |
|  | 4 |
|  | 5 |
|  | 6 |
|  | 7 |
|  | 8 |
|  | 9 |
|  | 10 |



施行されつつあるが、テヘラーンほど大規模な都市計画はみられない^②。テヘラーンでは古い家屋をどしどしとりこわして、アスファルト舗装の直線状の広い道路が、市街を南北、あるいは東西に何条も通じ、道路の交差点では、緑地帯や中央に噴水を有する広い「広場」^{マイダニ}が設けられ、都市の美観をそえている。

このような都市の発展にともなって、人口も増加し、1920年ごろまではテヘラーンの人口は20万ほどに止っていたが、第二次大戦後の現国王の時代になって一躍百万都市にまで急激な膨張を示し、最近では1,663,000の人口を有すると推定されている^③。したがって現在の新市場は南北、7—8 km 東西 9 km 以上にわたり、その面積は城壁撤去前にくらべて三倍ほど大きくなり、約 50 km² に達している。

しかも市域の発展段階に応じて、市内にはなお古い都市景観を止めているところも少くない。特にサファヴィ朝時代の旧城内区では、その中心をバザールが占め、バザールに接して Masjid-i-Shah のモスクがある。テヘラーンのバザールも他の都市にみられるのと大差はないが、規模ははるかに大きく、狭く薄暗い道路の両側には、衣料、絨氈、

金属細工など各種の店舗が立ちならび、オリエント独特の雰囲気を感じられる。バザールから南部にかけての市場は、都市計画による道路に面する部分を除いて、昔ながらの迷路状の狭い道路と低い家屋が密集し、主に労働者、日雇などの低所得者の居住区となっている。またバザールに面する旧内城は、今日では歴史博物館として公開されている Gulistan 宮殿以外は、大蔵・法務・厚生省などの諸官庁が占め、その西には、新たに Park-i-Shah とよばれる美しい植物園をもつ広い公園が設置された。

カジャール朝時代の新城内地区は旧城内地区に較べると道路の屈曲も少なく、都市計画の広い直線道路もより多く通じている。テヘラーンの都心をなしている現在の「セバー広場」(Maidan-i-Sepah) は、以前よりやや縮小されたが、かつて旧城内の北側に位置していた「大砲広場」である。この広場から北に派出する Ferdowsi, Lalezar, Saadi 街、およびこれと直交する Naderi, Istanbul 街がテヘラーンのビジネスセンターをなし、国立銀行の Bank-i-Melli をはじめ、高級商店、外国商館などが近代的商店街を形成している。またイスタンブール街の東端には、国会

議事堂およびナースル・アッディン・シャールのときに建てられた Masjid-i-Spalsalar の壮麗なモスクがある。

このビジネスセンターに対して、「セペー広場」の西の旧練兵場跡には、国防・文部・外務省などの多くの諸官庁や考古博物館などが集って、旧内城の地域とともに官庁街をなし、さらに新城内西端の閑静な Kakh 地区には現王宮や首相官邸などがあり、それに接して街路樹の並木の美しい Pahlavi 街が、市街の南端のテヘラーン駅から南北に通じ、エルブールズ山麓の Shemiran にまで達している。

市内の建築も近年は、新城内区のビジネス街に近代的なビルディングが増加し、また官庁街ではナン・ナリズムの風潮を反映して、アケメネス風を模倣した高い石柱と広い壁面を有する建築がみられる。しかし繁華街をはなれたところでは、道路に木造のペランダが突き出た、二階建のカジュアル様式の建物や、前庭にベルシァ式の庭園を有する住宅などが、まだ数多く残っている。

しかし最近のテヘラーンの特色は、特に第二次大戦後に、新城内区の外側に発達した新市街である。その中心は、北辺の城壁を撤去した跡につくられた Shahreza 街であり、

西は Mehrabad 空港や Qazvin 街道に、東は Mazandaran 街道に通じ、市内でも交通が最も頻繁であり、真中に緑地帯を挟んだ道路の両側は新興の商店街としても発展しつつある。またシャーレザ街から以北の地域は新しい住宅街をなし、テヘラーン大学も所在し、アパートや集団住宅の建設が各所に行われ、むしろアメリカ的な都市景観を呈している。

四

テヘラーン周辺では、市街地から直ちに植物も殆ど成育していない荒涼とした半砂漠地帯に移行しているところが多い。それは前述のように、この地域は粗鬆なテヘラーン層が厚く被覆して地下水面が深く、エルブールズ山麓からのカナートによるテヘラーン以外は、集落の発達に適さないからである。特にテヘラーンから西方の Karaj, Sanjbulak の地区にかけては、鉄道沿線でも集落らしいものが見られない無住地域がひろがっている。しかしテヘラーンから北部のエルブールズ山麓地帯では融雪水によって山間から小河川が流下し、またテヘラーンから南部の扇状地末

端の近くでは地下水面が比較的浅く、カナートがよく発達し、多数の集落が分布して、テヘラーンを挟んで二つの集落地帯を形成している。(第一図参照)

これらの集落の殆ど大部分は、テヘラーンの都市化の影響が全くみられない純然たる農村であり、水の乏しい地域であるため、小河川の谿口やカナートの出口に接して位置する密集した集村をなし、周囲には耕地や果樹園をめぐらしている。またかつては治安の關係から高い土塁にかまされ、見張塔を有するいわゆる城砦 (Qal'eh) 型集落をなすものが多かったが、今日ではこのような防禦的集落はもはやみられない。

テヘラーン一帯の地域はイランでも気候の乾燥の著しいところであり、無灌漑の天水畑作農業が行われるのは、年降水量 500 mm 以上を有し、積雪量も多いエルブルズ山脈の山間地帯に限られ、年降水量 200 mm 以下の平原地帯では、前述のように山麓地帯は山間からの小河川、扇状地面はカナートによる灌漑がみられる。しかし夏が極度に乾燥し、また粗放的な二圃乃至三圃農業しか行われないので、テヘラーン周辺でもイランの他の地方と同じように、冬作

中心の農業が営まれる。すなわち秋に播種し、冬の雨を利用して成育せしめ、夏に収穫される小麦と大麦とが主作物である。これに対して夏作としては蔬菜、果樹類が灌漑を利用して補助的に栽培されるに過ぎないが、Karai, Rey, Waramin などテヘラーン市場を近くに控えたところでは農業の集約化も進み、メロン、トマト、ブドウなどの蔬菜や果樹のほか、工芸作物としてワタおよびテンサイの栽培が増加しつつある。しかしイランでは農地改革はまだ僅か王室領の耕地に行われたに止り、テヘラーン周辺でも依然として大土地所有が支配的であり、耕地の大部分はテヘラーンなどに居住する少数の不在地主に属している。そのため農民の多くは貧困な小作農であり、近代化されたテヘラーンの都市生活とは比較にならないほど、これらの農村の生活は貧しく、遅れている。またエルブルズ山地では、クルドやトルクメンなどの遊牧民が居住し、夏の間は山地の高所で放牧し、冬の間は平原地帯に移動してくる移牧 (Transhumance) を営んでいる。そのためテヘラーン周辺でも遊牧民の多数の天幕集団をみることは稀でない。

このようにテヘラーンと、その周辺とは地理的景觀に

も大きな相違が認められ、また生産都市でないテヘラーンの場合には、大都市に一般にみられるような衛星都市の発達を欠き、テヘラーン以外には大きな都市は存在しない。そのうちでも比較的都市的色彩の高い集落としては、テヘラーンから西方 40 km の位置にある Karaj（人口約 16 万）である。カラジは古くからの Qazvin 街道のカラジ河の渡河点に発達した交通集落であるが、カラジ河の谿谷を通じてエルブルズ山脈を横断し、カスピ海沿岸の Chalus に達する自動車道路も近年開通し、交通要地としての重要性をさらに加えるに至った。またカラジには農業大学とその試験農場が所在するほかに、テンサイ栽培の中心をなし、国営の製糖工場があり、第二次大戦中には製鉄所の建設も計画されたが、現在ではこの計画は変更され、製鉄所の建設は付近に鉄鉱および石炭資源の所在する Arak の Shams-abad に予定されるようになった。しかし最近カラジから 20 km 上流のカラジ河に高さ 180 m、長さ 390 m のアーチ型ダムが完成し、テヘラーンの上水道への供給のほかに、約 10,000 ha の灌漑耕地と 120,000 kW の電力が開発されるようになり、この電力資源によって、カラジの工業都市

化が期待されている。

カラジから東方では、エルブルズ山麓に沿って Karajrish などの多くの谿口集落が発達している。なかでもタジリッシュは Shemiran と総称されるテヘラーン北郊の中心をなしている。シェミラーンは高度約 1,800 m の高所にあり、夏でも気候が冷涼なため古くからテヘラーンの避暑地として発達し、王宮をはじめ、ホテルやテヘラーン市民の別荘が集まり、テヘラーンとは Pahlavi, Shemiran の二つの自動車道路によって結ばれ、自動車やバスで容易に達することができる。

テヘラーンの南郊では、Rey（人口約 1 万）がある。シール派の聖地として知られた金色のドームを有する Shah Abdal Azim のモスクと、それに接してレザー・シャーの廟墓が所在し、旧都レイの廃墟も位置している。また背後には、アンティ・エルブルズ山地の最西端をなす Bib-i-haharbanu の丘陵があり、石灰岩をもって構成されているので、1933 年および 37 年に二つのセメント工場が設けられた。近代設備をそなえ、600 十の生産能力を有している。そのほかレイに近い Ghanjabad にも、小規模ながら国営

の銅精錬所があり、原鉱はエルブルズ山地に産出する銅鉱が用いられる。

レイからさらに約 35 km ほど東南の Waramin (人口約 7,000) は、アンティ・エルブルズ山地を流下する Jajerud 河扇状地の中心集落であり、レイなどと同じく古くから栄え、遺跡としては、八世紀ごろの Qalah-i-Gabri (ゾロアスター教徒の城砦) Abu Said の 1325 年に完成された Masjid-i-Jomeh (金曜日のモスク) などがある。またこの付近はテヘラーン周辺では土地は最も肥沃で水利に恵まれ、鉄道やトラックによるテヘラーンへの出荷も便なので、近郊農業はよく発達し、さらに国営のテンサイ製糖工場や植物油脂 (オリウ油と棉実油) 工場が所在する。

またレイから西方の Shahriyar, Pashapuyeh の地区にかけては、カラジ河、カン河の下流にあたり、地下水も豊富で、Clapp が平均 2.5 km² に一村の割合と推定しているほど、多数の集落がカナートとともに発達している。しかし全くの農村地帯で大きな集落はなく、テヘラーン・ヤズド間の鉄道の開通によって発達した Robatkarim か、製糖工場を有する Kahrizak などが主なものに過ぎない。し

かもこれより以南の地域では、前述のようにバッド・ランド状を呈する Kenaregirud などの丘陵群が横たわり、また低地は地下水の停滞によって塩性ステップをなしている。^⑧

そのため集落は急激に滅び、Robatkarim—Waramin を結んだ線から南では殆ど集落の存在しない無住地帯となり、ヴァラミンの扇状地の南端からは、Kavir 砂漠に連なる Masieh の塩性沼沢地が広大に展開している。

テヘラーンから北部および西部のエルブルズ山地では、地形が峻峻で集落の分布は著しく少ないが、Jajerud 河上流の Shamshek には古生代および中生代に属する Talaran 層群が延び、ジュラ紀の石炭層が埋藏され、良質の瀝青炭を産出し、テヘラーンに出荷されている。^⑨しかし交通が困難でトラック輸送によるため、採炭は小規模で産額も少ない。またテヘラーンから 60 km ほど東に距っている Demavand (人口 5,000)、はマザンデラン街道からややはずれた位置にあるが、高度 2,340 m の高所にあつて夏は甚だ冷涼であり、北にはエルブルズ山脈の最高峰デマヴァンド火山がそびえ、風光もすぐれている。そのため近年はシェミラーンに次ぐテヘラーンの避暑地として発展し、エ

ルプールズ山地では最も大きな集落をなしている。

五

以上において、テヘラーンとその周辺について述べたのであるが、テヘラーンでは人口調査さえまだ実施されていないほどであるから、テヘラーンの都市構造や機能について考察し得る資料を求めることはできない。しかしテヘラーンは現在160万人以上の人口を有するにも拘らず、生産都市としての機能が極めて低いことは予想される。たとえばWilberはイラン全体の工業従業者を20万人と推定しているが、そのうちの石油産業5万人、鉄道関係12万人、絨氈製造60万人を除外した約10万人⁽²⁾の二がテヘラーンに集中しているとしても、テヘラーンの工業従業者は家内工業や、トラックなどの交通関係従業者をすべて含めて50万人の程度であろう。また事実、テヘラーンにおいて比較的大規模な近代的施設を有する工場は、火力発電所、政府専売の煙草工場や鉄道車輛工業、或いは若干の兵器工廠などであり、そのほかは国営、私営を含めて小規模な織物、食料品、醸造、金属加工、石鹼などの消費財工業

か、市街の南郊に集中している伝統的な零細経営の煉瓦製造業などがみられるに過ぎない。

したがってテヘラーンが第二次大戦後に百万都市に発展したのも、テヘラーン自体の産業の発達によるよりは、中央集権の体制の強化にともなう政府諸機関の集中と拡大によるといえる。おそらくテヘラーンでは、政府や商社関係の俸給生活者や軍隊の都市人口に占める割合は、イランの他の都市よりもはるかに高く、また典型的な消費都市の特色として、商人、金融業者、不在地主などの富裕な階層と、それに雇傭される家事労働者や日雇労働者などの貧困な階層も多く、人口過剰の農村から、日雇か何かの職を求めてテヘラーンに年々流入する人口も少くない。このような人口の社会構成にみられる相違は都市構造にも反映し、テヘラーンの近代化はビルディングや高級アパートの建設など、ビジネス街や住宅街においてこそ目覚しく進展しているが、旧城内や南部の、下層の市民の居住する地区では近代化から取り残され、電燈さえないスラム街も一方では増加している。また社会階層の懸隔は都市内部ばかりでなく、テヘラーンと周辺の農村との対比においても強く表われ、一部

の近郊的集落をのぞけば都市化や近代化の影響は全くみられず、テヘラーン一帯の農村におりても、昔ながらの泥土をかためた姿もない貧しい家屋が集まり、低い水準に停滞した生活が営まれてゐる。

- ① テヘラーン周辺の自然地理については、主として次の文献を参照。H. Rieben: The Geology of the Teheran Plain. Am. Journal of Science, 1955, p. 617~639.
- P. Bout, M. Derrau, J. Drech et Ch. P. Peguy: Observations de géographie physique en Iran septentrional. Mémoires et Documents (Centre National de la Recherche Scientifique) Tome VIII, 1961, p. 13~101.
- ② F. C. Clapp: Teheran and the Elburz: Geogr. Review, 1930, p. 69~85.
- ③ Ganat (トナヨウ語) もしくは Karez (ケルン語) と呼ばれ、乾燥地帯におりて地下水を地上に導引するための特殊な構造を有する地下水路であり、テヘラーン周辺をカナートが典型的に発達する地域である。拙稿「イランの灌漑——トナヨウカナートの調査」『文明の十字路』(京都大学イラン・ボンカリスタン・メキスタン学術調査記録) p. 1~22.
- ④ H. Bobek: Teheran, H. Kinzl-Festschrift. (Schlern-Schriften, Nr. 190), Innsbruck, 1958, S. 5~24.
- ⑤ Thornthwaite の方式によるテヘラーンの可能蒸発散量の数値は、前記の Bout etc. 調査報告による。

- ⑥ A. F. Stahl: Teheran und Umgebung. Pet. Mitt., 1900, S. 49~57.
- ⑦ A. Houtum-Schindler: Eastern Persian Irak. London, 1897.
- ⑧ L. Vanden Bergh: Archeologie de l'Iran ancien. Leiden, 1959.
- ⑨ The Book of Tobit, I. 14.
- ⑩ Arrian: Anabasis, III. 20.
- ⑪ Strabo: XI. pp. 514, 524.
- ⑫ A. Gabriel: Die Erforschung Persiens. Wien, 1952.
- ⑬ Rieben: *ibid.*
- ⑭ L. Lockhart: Persian Cities, London, 1960.
- ⑮ V. Minorsky: Tehran (The Encyclopedia of Islam, Vol. IV) の引用による。その意味は「テヘラーンの規模はイスラーム世界最大の Lockhart の記載より大なりである」。
- ⑯ Narrative of the Embassy of Ruy Gonzalez de Clavijo to the Court of Timour. (The Hakluyt Society, H. 26)
- ⑰ W. Foster: Thomas Herbert Travels etc. London, 1928.
- ⑱ G. A. Olivier: Voyage dans l'empire Othoman, l'Égypte et la Perse. Paris, 1807. The Encyclopedia of Islam の引用による。
- ⑲ Bobek: *ibid.*
- ⑳ Stahl: *ibid.*
- ㉑ Rieben, Bobek の引用による資料による。

- ⑳ K. Scharlan: *Moderne Umgestaltungen im Grundriss iranischer Städte*. Erdkunde, 1961, S. 180~191.
- ㉑ Geographische Statistik: Iran. *Part. Mitt.*, 1962. Bobek: *Ibid.*
- ㉒ 拙稿「イランの農業」『人文地理』12巻2号
- ㉓ D. N. Wilber: *Iran, Past and Present*. Princeton, 1958. Rieben: *Ibid.*
- ㉔ Bobek: *Ibid.*
- ㉕ Wilber: *Ibid.*

(京都大学教授)

been laid on the relations between political stability and the role of the statesmen. This paper, from this point of view, aims at understanding the character of liberalism in Prussia on the eve of German unification.

In 1866 an essay, “Der Deutsche Liberalismus Eine Selbstkritik” by Hermann Baumgarten was published. It is one of the most remarkable —though today largely forgotten— documents in the history of German liberalism. Like most liberals, Baumgarten had opposed Bismarck and the King. But in the essay he declared that he and his fellow scholars had been wrong, and that they had been beaten by Bismarck’s Realpolitik. Such a change of opinion among the liberals was one of the outcomes of the Constitutional Conflict and it led to the formation of the National Liberal Party. Therefore, by analysing the political process, we shall be able to clarify the character of liberalism on the eve of German unification.

The ideal of the National Liberal Party was to be that only the traditional upper class could govern, and that henceforth the citizen should give up trying to win political power and abandon himself to pursue only bourgeois interests. Baumgarten also concluded in the essay that the citizen had been born to work but not to be a statesman. After 1866 Germany did not know liberalism as it was developed in England. A Gladstone and a Mill would be out of place in the modern history of Germany.

Tehran, Capital of Iran

by

Takeo Oda

Iran’s capital, Tehran, is located in a vast basin at the southern foot of the Elburz Range of mountains. The area around Tehran has a dry climate, but as it abounds in water from the snows of the Elburz Mountains and also in subsurface water, and is at a strategic location on the routes of communication, it was one of

the first areas of Iran to be developed.

In ancient times Rey, the capital of the Seljuq Turks, flourished at the center of this area. But as a result of the invasion of Mongol armies, the capital at Rey was abandoned and Tehran developed until the Safavi Dynasty built a fortified wall around it. It was later made the capital of the Qajar Dynasty and because of the expansion of the city area the old Safavi wall was done away with and a new fortified wall built on an octagonal plan after the model of the wall of Paris.

The development of Tehran as a modern city, however, is the result of modernization during the reign of the present Shah, Reza of the Pahlavi Dynasty. Tehran is now second only to Cairo among the large cities of the Middle East with a population of about 1,600,000. It is a relatively nonproductive city indulging in typical consumption patterns. One cannot see any satellite cities developing around it, and the disparity between city and surroundings is conspicuous. Even within the city, reflecting the social structure, there is a vivid contrast between modern thoroughfares and streets of slums untouched by modernization.

The Origins of Chinese Buddhist Statuary

by

Seiichi Mizuno

It is well known that Chinese Buddhist statuary had its origins in India. Chinese images were of the Gandhara style. But though this style was transmitted to China, it was not to continue in its original form. Relations between India and China did not consist of religious missions and pilgrimages alone, but also included frequent economic exchange, with its influence acting, on occasion, as a source of changing forms of imagery. The fact that through such relations between the two countries certain tendencies were shared between them is indicative of the existence of a genuine history of the human race.